

朱注に背いた学者の行く末

近頃ある儒者（江村北海、一七二三—一七八八）が書いた物に、

唐土<sup>とつど</sup>では、宋の末期より元・明、今の清に至つても、朱注<sup>32</sup>に背く異説を説く事は、上から固く禁じられているのである。明の太宗（永楽帝）の時、ある儒者は程朱<sup>ていしゆ</sup>の説を批判し、新たに自分の考えて四書<sup>ししよ</sup>の注を作り、都（北京）に来て天子（皇帝）に差し上げたところ、太宗は非常にお怒りになってその書を焼き捨て、その人を鞭打<sup>むち</sup>つて追放した事が『寄園寄所寄』に見える。…中略…これはもちろんこうなつて当然である。その訳は、漢土は文字の国であるから、上より出る勅宣<sup>ちよくせん</sup>、下よりの上奏文の類も、経書<sup>35</sup>の意味、経書の言葉を交えて用いないという事がない。それなのに我が国の今日のように様々な学説が対立しては、上下の間に間違いや差し支えが多いであらう。世間で言つ通り、

32 朱注—朱子学の祖・朱熹が四書に付けた注釈。

33 程朱—朱子学の先駆者である北宋の程頤と大成者である南宋の朱熹の二人。

34 四書—儒学（朱子学）の代表的な経典『大学』『中庸』『論語』『孟子』の総称。

35 経書—四書・五経などの儒教の経典。ここでは四書を想定している。

「書は文字を同じくする」(『中庸』)べきである。

と言っている。

今思うに、これは甚だよろしくない掟である。漢国(からくに)(シナ)でも、古注(古代の注釈)はもちろんの事、宋以後にも朱注と異なる説があれこれとある。皇国(みくに)では最近になって、とりわけ程朱(ていしゆ)の誤りを指摘する者が多い<sup>36</sup>。あれこれと合わせて見ると、「朱注は誤り」という事について、まったく異論がなさそうな者が実に過半である。それなのに「朱注以外の意味があつてはならない」と定めて、異説を禁じるに及ぶとは何事か。

明の太宗(たいそう)のやり方は、とりわけ甚だしい誤りである。たとえ他の説が良からうが悪からうが、色々な説が出て来れば、その中には必ず古人がまだ発表していない良い説も出る物なのに、その道を塞ぐとはどういう見であるつか。もしその説が悪くて、採用せずに終わるとしても何の問題があるつか。これは聖人の道を尊ばず、ただ朱子だけを尊ぶという物である。それなのに、その掟をまるで良い事であるかのように引用しているのは甚だしい誤りである。

36 程朱の誤りを指摘する者 - 日本の朱子学批判は伊藤仁斎、荻生徂徠に始まる。

勅宣・上奏文の類に間違いが出て来て差し支えるというのは、いよいよ理解できない事である。もしその理由で禁じるのであればいよいよ誤りである。自分の代の勅宣・上奏文に差し支えると言つて、聖人の道を自分が好む方向に定めておくような事は、私の甚だしい物である。

それから同書に、初心者ちやくせんの詩の作り方を教えている中で、

所詮、習作として二、三百も作る内の漢詩は、仲間以外の人に見せるはずもなく、将来詩集に収録するはずもないのだから、古人の詩を遠慮なく剽窃ひょうせつして作つて覚え、それでもまだ足りなければ、『唐詩礎』、『明詩礎』、『詩語碎錦』<sup>37</sup>などのような物でつなぎ合わせてこしらえるのが良いのである。

と言っているのは良い教え方である。

37 『唐詩礎』、『明詩礎』、『詩語碎錦』—江戸時代に出版された作詩の手引書。